
【哀しき月の夜に】

玻璃乃柘榴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【哀しき月の夜に】

【Nコード】

N9879A

【作者名】

玻璃乃柘榴

【あらすじ】

月夜に現れては消える、紅髪の少女の物語。人間でもない、幽霊でもない。不思議な少女のファンタジー小説。

【オープニング】

儂く哀しげな物語は、月夜から始まる。

「満月と三日月。セナはどっちが好き？」
ぼんやりと、月が出ている。

「……月は嫌い」

セナと呼ばれた少女は、それだけ言うと、雲に隠れた月を見て溜め息をつく。

月は輝く。太陽の力を借りて、輝き続けている。

それが嫌なのだ。自分の力で、実力で綺麗に輝く訳ではない。卑怯だと思う。なのに、いつも何故か、月に目がいく自分も大嫌いだ。

自分は、世界の全てが嫌いで、背を向けたくて、逃げたい。『自分からは逃げられない』それは知っているはずなのに、そんな考えが浮かんでくる。

「セナは……ホントは全部、大好きなんですよ？」

「……はあ？」

薄い紅の髪の少女は立ち上がり、クスクスと笑った。

セナの背後に回り込み、座り込む。二人は背中合わせの状態になった。

「意地はってちゃ駄目だよ。月だって、ホントは好きなんですよ？」

全部嫌いなんで言ったら、自分の存在の意味が無くなっちゃうよ」

セナは驚いた様だったが、すぐにいつもの無表情に戻った。

少し考えてから、こう言った。

「……そう、かもね」

静かな風が吹いて、時が止まった様に思えた。

セナは後ろを向いて微笑む。

「えっ？」

少女の姿は無く、風はどこかへ行った様だった。

「もう、あの娘は大丈夫だね」

少女の姿は消え、声だけが闇から聞こえる。

「私みたいにならなかったもん」

彼女の微笑みが、一瞬だけ月に照らされた。

少女の姿も、声も、直ぐに月夜に溶けて消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9879a/>

【哀しき月の夜に】

2011年10月3日15時54分発行